

だいや川通信

今市の水を守る市民の会

第60号

2026年3月11日(水)

水枯れ日本とダムの水

午年の今年 思い出す事が幾つかありました。一つは50数年前に岩手の遠野を一人旅した宿での夜。食事後に鈴木サツさんという語り部の方から「おしらさま」という話を聞きました。遠野弁で語られるそれはしっとり、しかも何とも心地良い調べ。じーと耳を澄ましていると隣に座る人達からも親戚のような安らぎが伝わってきて、次の晩も聞きたくなり一泊のつもりが二泊に。養蚕の盛んだった土地で語られてきたこの昔話は馬と娘が夫婦になるという内容で、空に帰って行った娘と馬の魂を慰める為に二つの顔を桑の木で作ったものが「おしらさま」です。養蚕の神様、目の神様、女子(おなご)の病気の神様として今でもそれは民家で祀られています。

もう一つは旧今市市で聞いた話です。馬は農作業の一役を担う大切な存在でした。以前のゆったりウォークで岩崎観世音をご案内下さった森山一郎様は、この観音様は馬の神様であり戦時中には徴馬される馬達が飼い主に引かれて沢山お参りに来た事、中国の戦地ではそれぞれ別の部隊だったのにある所での休憩の時、かつての飼馬が先に飼い主を見つけて鼻を摺り寄せてきたという知人の話を語って下さいました。私の友人は子供時代に飼馬の餌やりや水浴びを手伝い、時には馬のたてがみを三つ編みにして遊んだと懐かしさを込めて話してくれました。農林業が主体であった昔は馬や牛との暮らしが当たり前であり、そこには田を潤す大谷川扇状地の地下水と山が生み出す水がありました。

守られた今市の水 今から30数年前のことです。この今市の水が奪われそうになったことがあります。鹿沼市に作る南摩ダムに水を溜める為に大谷川から水を取り、それを貯水するダムを行川に造って南摩に送水するという計画が本格化しました。その時、当会前代表・福田健彦氏のグループや多くの団体、行政も加わって反対運動がおこり、数年後に今市からの取水計画は撤回されました。

再びダムの水問題 その南摩ダムでは本体工事は現在完了した事になっていますが、そこに水を送る黒川と大芦川からの導水工事は一向に進んでおらずその水は貯まっています。にもかかわらず栃木県は数年前から県南の二市一町(栃木市・下野市・壬生町)に対して南摩ダムからの水を利用せよと押し売りを仕掛けてきているそうです。その二市一町



2月14日市民集会資料より
南摩ダム

では、豊富な地下水を100パーセント利用して水道事業が賄えているのになぜ高くて不味い水を買わなくてはならないのかと、住民の間で問題になっています。

2月14日(土)、栃木市市民交流センターにおいて二市一町の団体をつなぐ「栃木県南地域の地下水をいかす市民ネットワーク」による現状報告会が開催されました。上水道・下水道ともに老朽化の問題が全国的に問題になっている現在、加えて人口減少による収入減が水道事業に追い打ちをかけ、料金値上げも現実味を帯びてきました。そこに、地下水を65パーセントに抑えダムからの表流水を35パーセント導入せよ、という事ではダムの維持管理等の関連費用がむしろ増えていきます。PFAS問題を取り上げる向きもありますが、地下水全体に影響しているわけではなく、むしろ表流水の方がさまざまな汚染物質を含んでいるとの事。下野市では汚染源が隣接の市と予想していますが、水源井戸の新設を現在工事中だそうです。今春、二市一町では議員の選挙があります。地下水を守るための正しい方向付けができるよう、お知り合いが二市一町に居られる方はぜひこの問題に目を向けて下さるようお声掛け下さい。

山火事 2月21日(土)昼過ぎ発生した山火事は南摩ダムのすぐ近くの栗沢でした。ここはかつていくつものグループが探鳥会や植物・水生昆虫の調査をした所です。住居の礎石が残っていた傍にはヤマナシの木があり秋にはたわわに実っていたことを思い出しました。今回の山火事では数日間続けた消火活動に使用したのはこのダムに溜まっていた南摩川の乏しい水と雨水でした。従来から水は溜まらぬと専門家より指摘されていた南摩ダム。昨年暮れから始まった雨不足は全国に及んでおり、各地のダムでは貯水率が極端に減っている中でのこの出来事には何ともやりきれぬ思いをしました。

今年の水 温暖化現象は人間が作り出したものであり、自然は大きく変わってしまいました。水不足はその一例です。今のところ水に恵まれている当市ですが、水不足が予想される今年。心して水を使いたいですね。(塚崎)

11月の貯水量:2%

目次:

水枯れ日本とダムの水	1
ポッカラ博物誌② 鳥類	2
ゆったりウォーク 手岡・猪倉 森の道	3
川むしたんけん隊 長畑 西沢川	4
活動報告	4

定例会のお知らせ

毎月・第4金曜日

午後1時~2時

参加希望の方は会場・日時をお問い合わせください。

◆ ご協力お願い

毎月11日はイオンの「イエローシートキャンペーン」日です。半年に一度、シート合計金額の1%が登録団体にカードで寄贈されます。当会も登録しています。毎月11日のお買い物時には、「今市の水を守る市民の会」のボックスにシートを入れてくださるようご協力お願いします。(印刷用紙、プリンタインクなど) 当会の活動に必要な品物を購入させていただきます。

ポッカラ博物誌

— 姿を消した身近な生き物たち —

② 鳥類 (トラツグミ・カワセミなど)

鳥類で最初に思いつくのは激滅しているというスズメとツバメなのだが、今回は紙面の都合もあり、それらは除く。

あまり野鳥に詳しくない筆者の頭に浮かぶ鳥は、まずトラツグミだ。1990年に新居ができたころ、最初のうち1階のガラス戸に衝突してしまう鳥たちが年に5~6羽くらいいた。しかしその数も3~4年経つうちに、かなり減っていったので、衝突除けのための猛禽類のシートなどを貼ることもなく現在にいたっている。ところが、かなり大型のこの鳥だけは、どういうわけかその後も2~3年に1度くらいの割合で激突死を繰り返していた。図鑑などで調べてみると、どうやらトラツグミ。夜中に「ブランコがきしむような、口笛のような声でさえざる。」という説明にも符合していた。その声は、しみじみと物悲しく、山里にふさわしい趣き深いものであった。そんなトラツグミだが、ここ5~6年筆者が夜間に屋外に出る機会も少なくなったせいも、消息不明だった。ところが2~3年前にまたもや衝突死。もしかしたら、これが最後の1羽?…そんな話を近所の方たちにすると、たいてい「ツグミは美味だったという話にすり替わってしまうのだが、これは同じツグミ科の「ツグミ」のこと。ツグミも以前はこの辺りではかなりいたようだが、激滅している点ではスズメなどと同様のようだ。

ウグイスとホトギスも近年、かなり生息数を減らしているように感じる。ポッカラに移り住んだころ、野鳥のことで、とても嬉しかったのは宇都宮の街中では聞けなかった、この2種の鳴き声かふんだんに聞こえていたことであつた。近所の高齢の方たちのなかには、冬の手仕事で器用に鳥かごを作ってウグイスを飼っている人も何人かいた。ホトギスの鳴き声も、「目には青葉、山ホトギス…」の俳句にも出てくる鳥なので筆者にも、それとわかつた。ところが近年、このどちらの鳥の鳴き声も聞くことが少なくなってきているように感じる。多くの人とそのことを話してみると、どうやら主犯(?)は環境省の特定外来生物ガビチョウかという話に落ち着いた。案の定この鳥は昨年、その危険性が二つの点で学術的に明らかになった。一つはガビチョウが夏の繁殖期に中央アルプスの高山帯2770メートルにあるハイマツの低木林など複数の地点で、雄が雌を呼ぶ鳴き声が確認されたこと。(①)もう一つは、この鳥が自分の周辺に生息する鳥たちの巣に入り込んでその卵を食べてしまうのが確認されたこと(②)である。どうやら、この鳥の、周辺の鳥たちへの危険性は今後かなり深刻な問題になりそうだ。

カワセミもポッカラの周辺から姿を消した鳥に入れておきたい。意外に思うかもしれないが、この周辺には谷戸(丘と丘に挟まれた谷間)の田だったような複雑な

地形のところも多く、カワセミがかなりの数、生息していた。しかし、その巣があつた川の両岸の垂直に近い土の崖は河川改修でコンクリート・ブロック積となり、餌場となる水路は圃場整備事業でU字溝や両面コンクリートの流れに変わってしまった。農作業の機械化の事などを考えると致し方ない面もあるのだろうが、旧今市市の市の鳥でもあつたカワセミが公共事業で生存条件を十分考慮されることなく追い払われてしまったのは残念なことであつた。それでもすべてのカワセミが姿を消したわけではない。日常の散歩途中の観察だが、ほぼ同じ何か所かの場所に1~2羽のカワセミが時々飛来している。ホバリングも急降下もできないような場所でも流れに降りているが、そうした本来の求食行動ができないのは何とも哀れに思える。

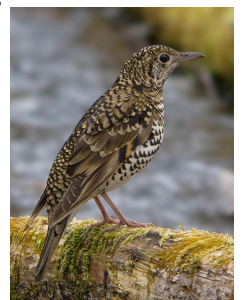
最後になるが鳴き声で気になるという点で、どうしても加えておきたい鳥に三光鳥がある。三光とは三つの光の意味で、さえずりが「月日星ホイホイホイ」と聞こえる。この鳥のことは当時、愛読していた屋久島の詩人、山尾三省さんの著書にも記されていたので名前だけは知っていた。詳しくはここで話す余裕もないが、この人にお会いしていなかったら、私たち家族がポッカラに移住することもなかったかもしれない。そのくらい強い影響を受けた人だつた。(③)

移り住んだ当初の数年の間、春先など、まだほかの鳥が鳴いていない早朝、ひとけのない隣の神社の森の奥から、かすかに特徴のある鳴き声が聞こえていた。ほとんど毎朝の事なので気になって、よく聞いてみると、それは前述の、三光鳥の特徴あるさえずりとしか思えなかった。ここから先はちょっと出来過ぎた話のように聞こえるかもしれないが、実はこの隣神社の名称が、なんと「三光」神社なのだ。これはすごいと一人悦に入っていたことを思い出す。だが30年近くも経つ今になってみると、自作自演(?)の作り話だつたのではと心配になってきた。ただ三光鳥は本州以南に飛来する夏鳥で、比較的暗いスギ林などで繁殖。栃木県では県民の森などでも見られるというから、まんざら隣の鎮守の森にいてもおかしくないとも思う。もう少し暖かくなったら窓を少し開け放っておいて、寝床の中でトラツグミや三光鳥の鳴き声が聞こえてくるのを待ってみようと思っている。(了・森)

① 朝日新聞2026年1月23日付

② 「特定外来生物ガビチョウによる直接的な鳥類の巣への捕食」 バードリサーチ
<https://db3.bird-research.jp:news>

③ 「希望としてのアニミズム
講演録—琉球大学の五日間」
山尾三省著
(野草社新装版2021年刊)



右写真・ウィキペディアより引用
ja.wikipedia.org/wiki/トラツグミ

ゆったりウォーク「手岡・猪倉 森の道」 2025年11月24日(月)



旧今市市南部にあたる手岡(ちょうか)地区を約3時間、11名で歩いてきました。集合・離散地は手岡の人丸神社です。以前、岩崎から手岡にかけて歩いたことがありましたが、今回は手岡から東の猪倉方面へ向かう約4キロのコース。アスファルトではなく、足に優しい土の道を選びました。テーマを「食を支える農の地」としたのはこの土地の持つ地形です。武子川に注がれる山からの水を利用する稲作り・野菜作り。小高い丘では肉豚生産の農場があります。県道149号線(小来川・文挾・石那田線)から東側地区を自分の足で歩き、その土地の持つ命を実感してもらえたらと思い、コースを選びました。

日光連山を仰ぎ、畑中央にどっしりと立つ大櫨の元で一休み。林縁を流れる武子川の堤に沿って土の道をのんびりと。水の中に泳ぐ幾つかの魚の群れも発見。なだらかな丘では国産飼料にこだわる生活クラブ生協の提携農場がありました。4,000頭もの豚を飼育し、出産が毎日ある暮らしは人間の子供と同じ様に大切に育てて約半年で出荷するそうです。病原体を持ち込まぬよう豚舎は立ち入り禁止のため見学はしませんでした。澄んだ大気のもとで命を育てる農場の方の説明には自ずと頭が下がりました。日光市と宇都宮市を分かつ小さな峠を歩き人丸神社に戻ってきました。



参加者の感想

モミジがきれいだった / 大櫨・武子川・堤防歩きが楽しかった / 子供の頃の光景と繋がって良かった / 元気よく歩けた / 田んぼ道は静かで良かった / 豚4000頭と聞いてびっくり / 子豚には特別な乳を与えるという事も初めて聞いた / 人に会わないのが良かった / ほどほどの距離でいい / 道中の会話が弾んで高齢者にはいい刺激だった

手岡の斎藤様と猪倉の宮崎農場様には計画作成中からたいへんお世話になりました。感謝申し上げます。(塚崎)

活動報告

9月10日(水) 会報59号 発行
9月26日(金) 定例会
9月27日(土) 川むしたんけん隊
10月31日(金) 定例会
11月24日(月) ゆったりウォーク
1月24日(土) 定例会

川むしたんけん隊

今市の水を守る市民の会・NPO法人なんとなくののわ

2025年9月27日(土)

午前9時30分～ 西沢川(長畑川上流)

西沢川は江戸時代から上流に花崗岩の採石場があったため、川底の小石や砂は白っぽく、水も透明度が高く、周辺のゴルフ場が閉鎖されて昔ながらの川の趣を取り戻した感があります。以前同じ場所で実施した時は「水質階級Ⅰ」のアミカが見つかりましたが、今回は見つからず。しかし虫の種類としては「水質階級Ⅰ」のものが多く、上流に育つ樹々からの養分が溶け込んでいる証と思えました。落葉樹の枯葉は水中で育つ微生物や藻類を呼び込み、それらを捕食する虫たちも育って冬を迎える生き物たちの命をつないでいきます。

当日は落合地区の運動会と重なってしまい児童の参加はありませんでしたが、小さなすくい網を使って大人4名で実施。結果は下記の通りです。

河川名: 西沢川

日時: 2025年9月27日(土) 9時40分

天気: うすぐもり 気温: 24℃ 水温: 18℃

川幅・水面幅: 20m・10m

川底の状態: 小石・砂礫

流速: 40cm/秒

水の濁り・匂い: なし

指標生物

水質階級 [きれいな水] に棲むもの

プラナリア(ウズムシ)、サワガニ、ヘビトンボ

ヒラタカゲロウ、カワゲラ類、ブユ類

水質階級Ⅱ [ややきれいな水] に棲むもの

タニガワカゲロウ類

水質階級Ⅲ と iv [きたない水] に棲むもの

見つかりませんでした。

だいや川通信
第60号



郵便振替口座 00140-4-535550

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方

今市の水を守る市民の会

0288-27-2183 (8時～17時: 森)

0288-26-3324 (17時～21時: 塚崎)

<http://www.somesing.net/daiyagawa/>

指標生物以外

水生昆虫 カクツツトビケラ、マメゲンゴロウ

トンボ(ヤゴ) サナエトンボ、カワトンボ2種、

ミルンヤンマ

トンボ(成虫) ナツアカネ

魚 アブラハヤ(稚魚)

西沢川上流部は、生き物の種類と数から「きれいな水」と判定できます。

川の中の生き物は、水系の違いや季節、当日の気温・水温、上流・中流・下流によって毎回見つかる種類が異なります。幼虫の姿からは成虫を想像できないものが沢山います。これからも今市地区内を流れる川に入っているいろいろな見つけたいと思っています。見学大歓迎。ぜひお出かけください。(塚崎)



編集後記

東日本大震災・福島原発事故から15年が過ぎました。原発倒壊の懸念もまだまだ残っていた5月、研究会を通じて『福島原発の周辺、山間部を除く南北100km・東西65km地域について2kmおきに土壌を採取し、飛散した放射能の分布を調べたい。協力を』との知らせがあり、少しでも力になればと参加メールを返信しました■6月6日午後、二本松市のホテルに到着。次の日から2日間、数人のチームで双葉町や川内村方面の土壌採取を行いました。予定地周辺で適当なポイントを決め、手順を確認しながら土壌を採取。空間線量を測定し、周辺の写真、位置情報、略図などで記録する作業でした。採取地点は「測定範囲の周囲5m程度までに車や建物などの大きな障害物がないこと、平坦な地形、植生の少ない場所」との条件。個人の庭での採取もありました。ご主人からは、震災直後の停電、余震のため家に入らず自家用車の中で何の情報もないまま暗い夜を一週間過ごした体験を伺いました。道路脇の大きな藁束は近づくのも危険とされる高線量でした■移動は貸し切りタクシー。二本松から現地への道、人けもなく草が伸び放題となった田んぼの様子に涙が出てきたことを今でも忘れません。作業を通じて土壌採取の方法や注意点を知り、日光市での土壌調査を始める原点になりました■放射能汚染の主成分は、ヨウ素131、セシウム134、セシウム137です。半減期30年のセシウム137はいまでも70%が地表にとどまっています。原発から放出された量が半分になるのはあと15年後、さらに30年が経過しても25%が残ります■福島土壌調査の概要は <https://www.rcnp.osaka-u.ac.jp/dojo/> で紹介されています。今後は土壌測定結果データ全部の公開が望まれます。(T)